

# 第四編

## 競走馬のふるさと・富里へ



### 風の優駿

～野馬から競走馬に至る歴史の風～



【競走馬のふるさと千葉県案内所 開館時間：午前9時～午後4時  
(土・日・祝日・年末年始は休館) ☎0476-11008 FAX0476-2985】

昭和63年1月に両国地区に北海道日高案内所について、2番目に開設したこの案内所では、関東最大の馬産地・千葉県と茨城県を統括エリアにして、名馬の紹介(ファンだった馬の飼養先、種牡馬、繁殖牝馬の成績、現役時代の競走成績など)や、牧場見学の情報と紹介(見学の可否・見学時間・期間)、牧場や生産馬の紹介、セリ市場の案内(開催日程など)を主に行っています。牧場見学は、馬の状態などで、受け入れの時間帯が変更になったり、場合によっては受け入れられないこともありますので、見学は必ず許可をとってマナーを守ってくださいとのことでした。

昭和44年の下総御料牧場の高根沢移転を機に当時、町に20数か所あった牧場を取り巻く環境も時代と共に大きな変化を迎えることになりました。馬の生産の主流は北海道に移り、ここ富里では、温暖肥沃な土壌と東京、中山の中央競馬や、地方競馬にも極めて近い立地条件を生かし競走馬の育成を中心とした牧場が多くなってきました。そんな中、早くから育成を取り入れた「篠原ファーム」と親子3代にわたり生産の夢を追う「山田牧場」のお話から「競走馬のふるさと」富里町の、歴史の風を追いたいと思います。

### 生産から育成牧場への転換

#### 新たな夢に向かって

【歴史はセリ市に引き継がれ】  
下総牧羊場の碑が立つ両国神社の近くに、県両総馬匹農業共同組合があり、ここには「競走馬のふるさと千葉県案内所」が設置され、牧場や競走馬などの情報を提供している。また、ここでは日本軽種馬協会千

葉県支部と千葉県両総馬匹農業協同組合によって、年1回、6月の下旬に2、3歳の競走馬のセリ市が両国家畜市場で開催されている。関東では唯一ここだけである。  
三里塚での話と同じく、佐倉牧から下総御料牧場の影響は、この地に民間牧場を多く育む要因となったが、時の流れは競走馬の生産から育成へと、その形態は変化していることである。  
育成とは、競馬場に出る前の若駒の初期調教や、現役馬の休養や故障の治療などのことを言う。  
中沢にある「篠原ファーム」と、旭の「山田牧場」を紹介していただき、富里の新たな馬の歴史を伺うことにした。

# 長く厳しい、育成牧場の一日

表舞台で花咲く努力

【篠原ファーム】

国道409号線沿い、中沢地区の一角に広さ約10haの篠原ファームがある。場内はダート（砂）の馬場や坂路、通称ロンギと呼ばれる初期馴致やウォーミングアップのための屋根付き円形運動場、放牧地や厩舎などが整えられている。

今でこそ調教育成がメインの牧場

であるが、アングロアラブの生産から、サラブレッドの繁殖を導入したのは昭和29年のとき。昭和43年ごろからは10年間ほど、繁殖牝馬を20頭、種牡馬を3頭所有し、毎年15頭以上の仔馬を生産していた。

国道沿いと競馬場に近いという地の利を生かし、徐々に育成調教牧場へと転換していったのは昭和57、58年頃のこと。育成が主体とはいえず、夢をあきらめられず、採算を度外視

した生産は、今に至るまで細々ではあるが続いているという。

また、牧場の朝は早く、夏は午前4時には放牧、そしてトレーニングが始まる。馬の体調や、競馬場への入厩、出走予定などのローテーションも考慮され、1周700mのコースを強弱合わせ、約8周は乗り運動し、簡単な手入れ、治療などが行われ飼料が付けられる。

また、午後3時からゲート練習

などの軽い調教や、厩舎作業、牧草刈りなどの雑務をこなし、夕方6時には作業を終える。競走馬はレースに備え、馬を心から愛する者たちの手によって、ベストなコンディションを作るための調教・育成が日々行われている。

デリケートな馬を管理するという難しさの中に、強い馬に仕上げるといふ目標も、競走馬に携わる人間の夢でもあると言う。



ゲート練習は基本中の基本で、うまく飛走できない馬は、レースにも出られないと言われている。



1時間近くかけて行われる、トレーニング後の手入れ。馬体の様子をチェックする機会でもある。



篠原ファーム代表  
篠原 義行さん

預かった以上は、どの馬よりも強い馬にして競馬場に送り出したい。勝つ馬づくりはスタッフの夢でもある。

この牧場では、総勢12人のスタッフで競走馬の育成を手がけています。うち二人は女性で、茨城、東京、神奈川出身の10代から20代の若者が中心です、美浦トレセンや競馬学校が近いこ

とから、厩務員課程を受験する人も多くおり、また、ここには、馬に触れるのも初めてという人もやっています。

最初の仕事は、飼料を作ったり、厩舎の清掃をしたりしながら雑用を

## 風の優駿

～野馬から競走馬に至る歴史の風～



こなし、段々に馬に慣れて行くことから教えていきます。競馬ブームによって、颯爽と騎乗する姿に憧れてきてても、結局は長続きはしません。とにかく、『馬が好

(700m走路で毎日行われるトレーニングは、人も馬も本番さながらである。競走馬の走力は、時速約60kmあり、風の強い日以外は、多少の雨の日でも調教は行われる。)

き』であることが第一条件です。また、2歳の夏までを北海道の生産牧場で過ごした仔馬が、10月から11月にかけてやつてきますが、その仔馬たちを「馴致」と呼ぶ、競走馬になるための初期調教を行います。初期調教では、ハミ付け、ハミ受け、引き運動、鞍つけ、騎乗運動の順に教え込みますが、仔馬にとって、それまで体験したことがないので、簡単にはいきません。牧場では、優しく、時には厳しく、競走馬としての基礎を教え込みます。馬の持つ「走る能力を引き出す」ための常足(ウオーク)、速足(ダグ)、駆足(キャンター)を基本に大駆足(ギャロップ)と、本格的なトレーニングを3歳春ころまでに仕上げ、競馬場へ送り出すという、根気のいる仕事です。この牧場からは、大井、船橋、川崎、浦和競馬場への出走が多く、地方と中央は8対2の割合です。競馬を終えた競走馬の休養、病気・故障馬の静養・治療をし、再び競馬場へ送り出すためのトレーニングも行っており、施設・スタッフ面でもおよそ50頭が受け入れ可能となっています。育成は生産牧場と比べるとリスクも少なく、経営は安定していると思います。預かった以上はやはり強い馬に仕上げ、競馬場へ送り出したいと思いますね。馬さんの夢にも応えたいし、それ以上に「勝つ馬づくり」はここで働くスタッフ全員の夢でもありますから。



山田牧場が今年生産した、地元の種牡馬のロイヤルスキーの産駒と母馬。10月の大安の日を選んで、母馬から自立するための第1歩として、別の放牧場に放され、徐々に馴致運動を行う。

息子・雅章さんのお話

「一生に一度の人生。好きな馬で仕事をしたい」と決断し、昨年の12月に会社を退職し、父の跡を継いで「競走馬の生産」に携わるようになりました。子供の頃から、馬に慣れ親しんで育った環境からか、ほとんど抵抗なく馬と接することができましたが、今年、自分で育てた3頭の馬の出産に立会ったときには、本当に緊張しましたね。

そんなとき、この道50年の父のアドバイスで、無事に3頭とも出産することができました。生まれた仔馬は、下総種馬場に繋養されている、ロイヤルスキーの牡馬です。

この仔たちは来年6月に両国家畜市場で行われるセリ市に、2歳馬として上場する予定です。

また、来年の春にはあのイシノサNDERの仔が2頭生まれる予定で、生産への期待も高まっています。

## Interview #6・7

生産・育成牧場として風のような優駿をつくりたい...雅章さん  
何かを継ぐということ、人も馬も宿命は似ているね...博司さん



親子3代の生産の華・山田牧場

山田 博司さん(右・74歳)  
雅章さん(左・41歳)

千葉県の馬の成績が低迷し、牧場の形態も生産から育成へと変わるなかで、サンデーサイレンスの血が入ってきたことで、馬産地の復活につながり、富里町で生産した産駒が大レースで優勝したら最高です。

将来は、生産から育成までを手がける牧場をめざし、自分が生産した馬が、一着でゴール板を駆け抜ける姿を見るのが私の夢です。

# 生産に賭ける情熱

水よりも濃い血のつながり

【山田牧場】

競走馬の生産牧場とは、その牧場が所有する繁殖牝馬を飼育し、その牝馬にもっとも理想的な種牡馬を選択・交配させ、誕生した仔馬を取り引きすることによって、経営を成り立たせている牧場を言う。

富里町にある18の牧場の中でも、山田牧場は、生産一筋で経営を支えた歴史を持つ。昨年、会社を辞め、念願の牧場経営を継いだ山田雅章さんは、夢と共に、複雑な気持ちでこの道を選んだと言う。当初は30代で牧場を継ごうと思っていたが、やはり、決心をするのには迷いもあった。そして、その迷いを断ち切ったの

は、「馬が好きだ」という強い気持ちから。

それは、幼い時から父の後ろ姿を見て、馬と接してきた日々の積み重ねから、およそ40年来の夢の実現と言えるものである。

しかし、「本当の夢はこれから始まります」とも雅章さんは語る。

水よりも濃い血のつながりは、馬のみならず、生産に賭ける情熱を、親子で引き継いだという、証なのかもしれない……

父・博司さんのお話

牧場は戦前は父が基礎を築き、戦後は私が、生産一筋に携わってきた牧場です。この仕事は、人から勧められてやるようじゃダメ。馬が好きじゃないと務まらないですよ。調教は、『馬には負ける、時間と日が勝つ』と言っていて、ゆっくり根気よくやるしかありません。出産が間近い馬を病気で亡くしたり、伝染病で馬を薬殺するなど、50年の間には何度も苦しい経験をしてきました。

それでも、やめないんだから、根っから馬好きなんだな。育てた馬がレースに出るときは、テレビの前で祈るような気持ちで応援します。

息子が跡を継ぎ、親子3代にわたって馬の生産を続

けられることは、本当につれしく思っています。小学生の孫が4代目を継いでくれたら……それは今の私の夢でもあります。馬が血統を継ぐことは、人が夢を継ぐことに、何か似ているような気がしてなりません。



博司さんが生産した馬で、数多く活躍した中でも、とりわけ思い出深い1頭にマルミヨ(牡・鹿毛)がいる。昭和47年8月の福島競馬1000mのデビュー戦で優勝し、同年9月の特別レースでも優勝。その後、東京競馬場でレコード勝ちをした。